

Well-being な住まい・地域づくりに向けたデザイン実践

-大牟田市の市営住宅でのリロケーションダメージの予防・軽減-

Design Practice in Housing and Community Development for Fulfilling Well-being

- Preventing and Reducing Relocation Damage of Residents at Municipal Housing in Omuta city -

○林瑞恵 (NTT 社会情報研究所) *1 西川嘉樹*1 正木哲 (有明工業高等専門学校) *2 藤原ひとみ*2 佐土原洋平*2
梅本政隆 (地域創生 Co デザイン研究所) *3 松浦克太*3 木村篤信*3
中莖優子 (大牟田未来共創センター) *4 山内泰*4 原口悠*4

*1 Mizue Hayashi, Yoshiki Nishikawa, NTT Social Informatics Laboratories,
1-1 Hikarinooka, Yokosuka-shi, Kanagawa-ken, 239-0847

*2 Tetsu Masaki, Hitomi Fujiwara, Yohei Sadohara, National Institute of Technology, Ariake College,
150 Higashihagio-Machi, Omuta-shi, Fukuoka-ken, 836-8585

*3 Masataka Umemoto, Katsuta Matsuura, Atsunobu Kimura, Co-Designing Institute for Polyphonic Society,
4-15-82 Higashinoda-machi, Miyakojima-ku, Osaka, 534-0024

*4 Yuko Nakaguki, Yasushi Yamauchi, Hisashi Haraguchi, Centre for person-centred ningen, Omuta,
1-2-1 Shiranuhi-machi, Omuta-shi, Fukuoka-ken, 836-0843

キーワード: Well-being, アイデンティティ, 住まい, 地域づくり, リロケーションダメージ, 対話, デザイン実践

1. はじめに

1.1. 研究の背景と目的

内閣府は、骨太方針2022⁽¹⁾において日本が目指す社会像として「個人と社会全体の Well-being の向上」を掲げている。Well-being は、身体的・精神的・社会的に良い状態を表すとされ⁽²⁾、Well-being 向上に向けては、身体的な健康状態に加え、精神的・社会的にも人が良い状態である住まい・地域づくりの仕組みが重要とされる。

本研究では、住まい・地域づくりにおいて、精神的・社会的な側面も含めて、人が Well-being に暮らし続けることができる仕組みの創出に向けて、大牟田市にある市営 A 住宅で実施した取組みと、そこから見出した知見を報告する。

1.2. 関連研究

健康や病気の予防の観点から、暮らしている人が健康になる町づくりについては、疫学研究⁽³⁾で検討されている。WHO は、地域に暮らす人が意識的努力なしに、健康に望ましい行動をとることで健康度が自然と高まる、長生きできる町づくりとして「ゼロ次予防」を提唱している⁽³⁾。

1.3. 実践概要

1.3.1. 実践対象地の概要

地域の特徴、市営 A 住宅の概要を整理する。大牟田市は、福岡県の南部に位置する人口約 10 万 7 千人⁽⁴⁾ (2023 年 8 月現在) のまちである。明治時代以降、石炭産業を中心とした鉱工業都市として発展してきたが、1997 年にはまちの発展の礎であった三池炭鉱が百有余年に及ぶ歴史に幕を閉

じた⁽⁵⁾。1959 年の約 21 万人⁽⁶⁾をピークに、人口がほぼ半減し、高齢化率は 37.7%⁽⁷⁾ (2023 年 4 月現在) になっている。

同市内にある、市営 A 住宅は、1966~1968 年に建設された、全 156 戸 (簡易耐火 2 階建) の住宅である。この市営 A 住宅では、住民が住戸を増築したり、住戸の周囲に庭や畑を作って植物や野菜を育てたりする等、住まいや、その周囲の環境への住民による主体的な住みこなしが行われてきた。住みこなし⁽⁸⁾とは、内発的な営みを行う生活空間に仕立てるための住民の建築への関与のことである。こうした住みこなしを通じて、人は住み慣れた住まいや地域の環境との関わりの中にアイデンティティを形成すると言われている⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾。そして、本研究では、このような住みこなしが実現した市営 A 住宅の在りように、人が Well-being に暮らすための在りようを見出すことができるのではないかと考え、市営 A 住宅に着目した。

このような状況下で、この市営 A 住宅の住民が、新たに建てられる市営 B 住宅に住み替え (移転による引っ越し) をする必要が生じていた (2023 年 8 月現在は引っ越し完了)。住まいと、その周囲の地域の環境を住みこなししてきた生活の場から、外構の大部分をアスファルトで固めた、コンクリート造の建物 (高層耐火構造 9~10 階) に引っ越しことは、住民に精神的な負担が生じることが予想された。住民の中には、50 年以上の年月を同住宅で過ごしている高齢者もあり、住まいと、その生活設備、周囲の環境の変化により、生活の様々な場面で混乱が生じることも予想された。

例えば、市営 A 住宅の住民の中には、自らの意思とは関係なく引っ越しをしなければならぬ状況に対する抵抗感のような、やり場のない想いを抱えている様子が見られる

方がいた。他には、住み慣れた場所から離れることによる生活の変化と、それに伴う心身の状況の変化に不安を抱いている様子が見受けられる方がいた。例えば、「環境の変化から、ぼけるのではないか」、「生活の楽しみだった畑や季節ごとの花を植えることが（引っ越し後の住まいでは）出来なくなることで、やる事がなくなり、元気をなくすのではないか」等の声が聞かれた。また、近隣住民や家族との思い出がある場所から離れることと、その関わりの中で形成してきた思い出や情景から離れなければならないことに喪失感を感じている様子の住民も多く見受けられた。さらに、住み替えの対象となる住民の多くが同じ住み替え先に引っ越しするものの、中には、この機会に準備された住み替え先ではない場所（例えば、離れて住む家族の元）に引っ越しをする住民もいた。そのため、長年、暮らしを共にしてきた住民の中からは、「仲良しグループが離れ離れになり、なくなってしまう」等と語られる様子が見られた。他にも、亡夫や家族との思い出がある家を離れることや、生きる張り合いの一部でもあるという散歩道や住まいの周りに作った畑がある暮らしから離れることへの寂しさを言葉にする様子も見受けられた。このように、住み慣れた場所である市営A住宅から離れるに伴う住民のリロケーションダメージ⁽¹¹⁾が想定された。

1.3.2. 課題設定

リロケーションダメージとは、それまで暮らしてきた物理的・人的環境から離れ、新たな環境での生活によって、引き起こされる身体的・精神的・社会的な痛手のことである⁽¹¹⁾。このリロケーションダメージは、人が住まいや地域の関わりの中で形成してきたアイデンティティに揺らぎをもたらすことが示唆⁽⁹⁾されている。

例えば、同市内の市営C住宅では、市営A住宅の建替えに伴う住み替えが実施される前に住み替えが行われた。その際に、住み替え後の住民の体調の変化、生活環境の変化や、隣近所の住民が変わることで隣人が誰か分からないこと、助け合いの関係性が機能しづらくなったこと等による、精神的な落ち込みが見受けられた住民がいたことが、市営C住宅の住民を対象とした対話的に関わる伴走支援活動（以下、対話的に関わり）を実施した関係者から報告されている。

市営A住宅で想定されたリロケーションダメージは、人が住まいや地域との関わりの中で形成してきたアイデンティティを毀損し、Well-beingが阻害され得るため、これを予防し、ダメージを軽減するための仕組みを見出すための取組みを実施することとした。具体的には、アイデンティティを継続・更新するための取組みを「人との関わり」「人と住まいの関わり」「人と地域の関わり」の観点で実施した。

1.3.3. 実践の進め方

NTT 研究所は、これまで大牟田市や大牟田未来共創センター（以下、未来共創センター）、NTT 西日本等と協働⁽¹²⁾して、「一人ひとりを大事にし、対話的に関わりを通じて、それぞれの潜在的な可能性（力）を引き出すこと」を目指す取組み⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾を実施してきた。今回の市営住宅での取組みは、その延長に位置づく取組みである。

本取組みは、住民49世帯（2022年当時）が暮らしてい

る生活の場で、人と人、人と住まい、地域の環境との関わりに直接的、継続的に関わる取組みである。そこで、住民や、そこでの取組みに直接的・継続的に関わるができる体制で実施するために、地域で事業を運営する法人や事業所等と連携した。具体的には、市営A住宅では、住民の暮らしへの対話的な関わりが、大牟田市、大牟田市営住宅管理センター、未来共創センター等を中心に実施されていたため、この活動との協働で取組みを実施した。

2. 市営住宅での実践の企画

市営A住宅の建替えに伴う住み替えが実施される前に住み替えが行われた市営C住宅の住民の中には、引っ越し準備の過程で、思い入れのあるモノ（例えば、長く使ってきた仕事道具）を含む、多くのモノを一度に手放したことで、その後の生活で喪失感を感じている様子が見受けられる方がいたことが報告されている。このように、引っ越しの準備段階から住民にリロケーションダメージを与える可能性があるため、本取組みでは、引っ越しに向けた準備に関わる課題に対応するための引っ越しサポートを行うとともに、引っ越しに伴うリロケーションダメージを軽減するための質的サポートを進めることとした。本取組みを進めるに当たり、市営A住宅での住民への対話的に関わりを通じて住民の状況を把握した。次に、その状況に対応する企画を立てた。本報告では、主にリロケーションダメージを軽減するための質的サポートについて整理する。

2.1. 住民の状況の把握

市営A住宅の住民49世帯（2022年当時）の状況を把握するために、以下の項目毎に一覧表で整理した。

- 接点の概要（住民との対話的に関わりを行うメンバーとの接点の度合い・接点について気になること等）
- これまでの暮らし・家族のこと
- 引っ越し・日常生活で気になること・心身の状況・心配ごと等
- モノ（荷物）について
- 引っ越し後の住まい
- 引っ越しサポートの必要性
- リロケーションダメージを軽減するための質的サポートの必要性

住民の状況を把握する過程で、住民の状況に応じて、個別に引っ越しサポートとリロケーションダメージを軽減するための質的サポートを計画する必要が見出されたため、それを計画するために夫々の個別シートで整理した。

2.1.1. 個別シート：引っ越しのサポート

住民と対話的に関わるメンバーが、本取組みを実施する前に、引っ越しのサポートを実施した時の経験を踏まえて、以下の項目で整理した。

- 引っ越しをサポートしてくれる人の有無
- 引っ越し費用（金額・手続き・管理状況）
- 荷物に関する課題（仕分け・処分・荷造り）

- 購入が必要な物品（給湯器，ガスコンロ等）
- 処分が必要な物品
- 住所変更の手続きに関する課題（住民票・電気・水道・ガス・電話等）

2.1.2. 個別シート：リロケーションダメージのサポート

リロケーションダメージを軽減するためのサポートに関するシートでは、住民が、人や、住まい、地域の環境の関わりの中で大事にしていることを捉えるために、以下の項目で整理した。これらの項目で整理することで、住民一人ひとりのアイデンティティに関わる要素を見出すことを試みた。

例えば、「入居年数」は、住民と市営 A 住宅の関わりを深さを想定するための手がかりの一つとして項目を設けた。「生活歴」，「自宅内（庭を含む）での思い出の場所/出来事」，「市営 A 住宅での思い出の場所/出来事」，「1 日の主な過ごし方」は、対話的な関わりを通じて、住民一人ひとりにとって大事な物事を本人と周囲とで捉えるために項目を設けた。これらの項目は、住み替え後の生活の組み立ての手がかりの一つとすることも想定して設定した。「引っ越しに対する思い」は、対話的な関わり⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾を持つ相手だからこそ話すことができる、引っ越しに向けた不安などの思いを住民が話すきっかけの一つとして項目を設定した。

- 入居年数（市営 A 住宅で暮らした年数）
- 生活歴
- 自宅内（庭を含む）での思い出の場所/出来事
- 市営 A 住宅での思い出の場所/出来事
- 現在の生活で大切にしているモノ/コト
- 1 日の主な過ごし方
- 引っ越しに対する思い

2.2. 企画の分類

1.3.2 節で設定した課題設定と、2.1 節で把握した住民の状況を踏まえて検討した企画のテーマを整理する。

- ① 人との関わり
 - 個人のアイデンティティの確認と更新
 - 取組①-1：住民との対話・人生の振り返り
 - 取組①-2：モノとの出会い直し
- ② 人と住まいの関わり
 - 安心できる住み替えの実現と、住み替え後の生活の組み立て・新たな環境で住みこなすための準備
 - 取組②-1：モデルルームを活用した、安心できる住み替えの実現と生活の組み立て
 - 取組②-2：新たな環境で住みこなすための取組み
- ③ 人と地域の環境の関わり
 - 市営 A 住宅の記録・地域の記憶の確認と更新
 - 取組③-1：市営 A 住宅の記録
 - 取組③-2：地域の風景との出会い直し

3. 市営住宅での実践

本章では実施した取組みの内容を報告する。

3.1. 人との関わり

3.1.1. 取組①-1：住民との対話・人生の振り返り

地域の福祉事業所等との連携で、住民が住まいや地域の環境との関わりの中で形成してきたアイデンティティを振り返り、潜在的に大事にしている想いを捉え、その想いに伴走する活動を実施した。この活動では、一人ひとりを大事にし、安心できる場で対話することで、人の意欲が高まり、自然と動き出す、という対話の力⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾に着目した対話的な関わりを持つことを目指した。例えば、本取組みでは、住み替え準備上の困りごとだけではなく、住民が人や住まい、地域の環境の関わりの中で大事にしていること等に注目する関わりを持つことを重視した。また、住民とのコミュニケーションでは、支援者と被支援者ではなく、お互いに一人の人として相対する対話的な関わりがあることが重要だと考えた⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾。

具体的には、住民一人ひとりと、住民の住まいで思い出の品の整理を一緒にする過程、住まいの周囲に作られた畑で畑仕事を一緒にする過程、集会所での食事会の過程等で、一人につき十数回以上に亘る対話的な関わりを重ねた。例えば、自ら増築し、亡妻と子供達との思い出が詰まる家で暮らす住民とは、増築の経緯や、そこで過ごした家族との思い出等、市営 A 住宅での経験や記憶について対話した。また、その住民の生活の一部である畑仕事と一緒に取り組んだり、大切にしている思い出の品や写真等を一緒に整理したりする等、それぞれに対する想いを捉える過程を大切にした。このような対話的な関わりを重ねることで、人と人、人と住まい、人と地域の環境の関わりの中で形成してきた、自身も気付いていなかった、内在する想いを、本人、周囲とで捉えることができた。こうした住民の想いを移転後の暮らしを組み立てる手がかりとした。

3.1.2. 取組①-2：モノとの出会い直し

住み替え前の住まいと比較すると住み替え後の住まいは手狭になるため、多くの住民は住み替え前の住まいにある荷物を手放さざるをえない状況であった。そのため、住民等は長く使ってきた家財道具を手放すことや、亡家族の思い出の品（例えば、写真や洋服）を手放すことを検討していた。

他方、思い出の品にまつわるモノについて話を聞いたり、家族写真の整理を一緒にしたりする過程では、住民が大事にしているモノの背景にある家族や友人との思い出や、家族や友人を大事に思った自身の思い等、様々な情景が本人と周囲との間で呼び起こされ、モノを手放すことに伴う苦しい胸中が語られた。例えば、自分のものは手放すことができるが、家族のために買ったもの（例えば、亡くなった奥さんのために仕立てた着物）は、手放すのが難しいという胸の中を明かす様子が見られた。中には、亡くなった家族のモノの整理の過程での精神的な落ち込みが懸念され、その支援が大切になることが想定された住民もいた。

この状況を踏まえ、モノの背景にある、その人が抱える想いを本人と周囲とで捉え、本人とその物事の関わりの中にある想いを大事にするための取組みを実施した。具体的

には、「モノの継承」として、住み替え後の住まいに持っていくことはできないものの、捨てることに躊躇があるものを他の地域の住民や学生等に継承した。例えば、住民の亡夫が大事にしていた背広や、住民が作成したパッチワークの作品等を譲渡した。また、「家具のリメイク」では、思入れがあるものの手放さざるをえないと考えていた食器棚や洋服箆笥を、住み替え後の住まいで利用できるように、寸法や利用用途を変えてリメイクした。長年、生活を共に過ごしてきたモノには、一つひとつに思い出があり、それを手放すことは、自身の人生の一部を手放すような感覚があると考えられる。モノの継承では、モノを他者に引き継ぐことで、モノ自体と、そのモノの背景にある情景を大事にできたことを住民自身が実感でき、このプロセスが、モノを手放す精神的な負担を免責することに繋がっているのではないかと考えられる。また、リメイクされた自身の家具を見た住民からは「自分でもまた、モノ作りをしたくなった」等の声が挙がり、自身の暮らしへの意欲が醸成されている様子が見られた。

3.2. 人と住まいの関わり

住み慣れた生活環境の中で自分らしく暮らす習慣や行動様式等を身につけてきた住民や、自身の身体状況や生活習慣に馴染むように、生活環境に手を加えて自分らしく住みこなしてきた住民が、住み替え後の住まいでも、住み替え前の住まいの文脈で暮らしを継続し、自分らしく住みこなすための手がかりを得るきっかけとなる取組みを実施した。

3.2.1. 取組②-1：モデルルームを活用した、安心できる住み替えの実現と生活の組み立て

住み替え後の住まいの室内空間の一部を、住み替え前の住戸の空室に再現し、その空間をモデルルーム的場(以下、モデルルーム)として活用した取組みを実施した。モデルルームを、住み替え前の住宅の中に設置したのは、住み替え前の暮らしの一部として住み替え後の住まいを住民が体験することで、新しい住まいが求める行動様式に自分を合わせる精神的な負担を和らげ、住まいを自分らしく手なづける機会を設けるためである。

市営A住宅は建設されてから半世紀以上経つため、住み替え後の住まいでは様々な生活設備の様式が変わることが予定されていた。その一例が、お手洗いの様式(汲み取り式トイレから水洗トイレへの変化)、玄関先の呼び出しの様式(チャイムからテレビドアホンへの変化)、その他にも、玄関鍵の様式、風呂の湯沸かし方法の様式等の変化である。そのため、これらの変化に伴い、多くの住民は生活の様々な場面で新たな行動様式を身につける必要があることが想定された。実際、市営C住宅の移転に伴う住み替え時には、住まいの生活設備の変化により住み替え後の生活への対応が難しく、精神的負担を感じる住民が見受けられたことが報告されている。

こうした中で、モデルルームでは、新しい住まいでの生活イメージを持ちながら、そこでの生活設備に慣れるための体験をする取組みや、新しい住まいを住みこなすための取組みを実施した。新しい生活設備に慣れるための取組みでは、インターフォンの使い方や風呂の沸かし方等を、住民とスタッフとで確認した。また、住み替え後の生活を組

み立てる手がかりを見出すための取組みでは、バリアフリーの観点から、新しい住まいの広さや材質等(例えば、浴室の床やバスタブの滑り具合等)を確認、体験することで、住民の身体状況に応じた福祉用具の利用を検討した。

本取組みを通じて、モデルルームで部屋の広さを体感したり、設備の使い方を確認したりすることで、新たな住まいに持っていく家財道具の見極めと、その配置、家族との部屋割り等、引っ越し準備の過程で向き合いきれていなかった現実的な悩みが浮き彫りになっている様子が住民に見受けられた。また、モデルルームを住民の暮らしに身近な場に設けたため、具体的な家具の配置や、荷物の選別に向けた相談、各種手続きの相談のために住民がモデルルームを訪れる状況が生まれていた。

これらの取組みと並行して、リロケーションダメージが起きる可能性が高いと思われる住民を対象として、2-3名のグループでの対話を中心とした会をモデルルームで催した。その結果、普段、住民と対話的な関わりを行うスタッフとの間での個別の会話や相談の場、住民同士の日常会話からは出てこなかった言葉が語られる様子が見受けられた。例えば、畑仕事や庭仕事を通じた繋がりがある住民等からは「引っ越ししてしまったら、畑ができなくなるし、皆とも(引っ越し後の住まいの)階が違うので会えなくなると思っている」と、感情をあらわにしながら言葉が語られた。そして、その言葉を聞いた、他の住民が思わず涙ぐむという状況が生まれていた。さらに、この言葉を受けて「私は、迷惑と思われてもいいから、(引っ越し後の住まいの)廊下を散歩するし、あなたの家にもピンポン鳴らしに行くからね」、「市営A住宅の皆で、お別れ会(ありがとう会)をしたい」等の、感情をあらわにしながら言葉が語られる状況が見られた。

この状況は、住み替え前の住民の住まいや集会所に集まって対話するのではなく、モデルルームで対話をしたことが要因となって生まれたのではないかと考えられる。長年、暮らしてきた住み替え前の住まいに設置した、住み替え後の住まいの空間や設備が再現されたモデルルームで対話したことで、住み替え前の日常生活の気配と、住み替え後の新しい生活を迎える現実感を同時に感じる状況が生まれている様子が見られた。その結果、住民が住み慣れた場から離れることで失う可能性のある物事や、住み替え前の暮らしで潜在的に大事にしてきた物事への想いが呼び起こされ、このような状況が生まれたのではないかと考えられる。

3.2.2. 取組②-2：新たな環境で住みこなすための取組み

住み替え前と比較すると、住み替え後の住まいは間取りや収納の大きさ等が変わるため、新たな住まいに持っていく家財道具の選択と、その配置、同居家族との部屋割り等について、住民から質問や不安の声が挙がっていた。そこで、住み替え後の住まいの様子を、住民が具体的にイメージできるように、住まいの情報をまとめた冊子「新生活のマドリ」を作成し、住民に配布した。この冊子は、部屋の間取り(1DK,2DK,3DK)に応じた、各部屋の特徴や収納、窓の寸法等をまとめたものである。例えば、ベッドの配置や、台所道具(ガス台・食洗機)の配置に不安を感じていた住民とは、モデルルームで部屋の状況を確認しながら、冊子で住み替え後の住まいの実際の寸法等の情報を確認し

て、住み替え後の生活の具体的な組み立てを実施した。この取組みに加えて、新たな住まいを自身の生活習慣や身体状況等に馴染むように、手を加えて住みこなすための準備のための取組みを実施した。

市営 A 住宅では、家族構成の変化に応じて室内空間を増やすために増築している住民や、住まいの外に設けた庭と、そこから見える景色を楽しむためにテラスを増設している住民、自身の身長に合わせて台所を使いやすくするために、自らが製作した棚を壁に取り付けて利用している住民など、住まいに手を加えて自分らしく住みこなしている様子が様々な形で見受けられた。

一方で、住み替え後の住まいは、壁の素材の変化（住み替え前は木造であるが、住み替え後はコンクリート造であるため、釘や画鋲等を打つことが難しい）等により、住み替え前の暮らしで実現していた住みこなしを維持・継続するための手がかりを住民等が掴みにくい状況であった。そこで、住み替え後の住まいを住みこなす手がかりを見出すための取組みを実施した。具体的には、市営 A 住宅の住民の住み替え後の住まいに、先に引っ越ししている住民の中に、自宅や玄関先のアレンジを工夫して、自分らしく住みこなしている様子が見られたため、これらの事例をまとめた事例集を作成した。加えて、住み替え先の住民等が住みこなしに活用しているグッズの一部（ドアストッパーやフロアマット等）を、モデルルームに設置して、今後の住まいの住みこなしのイメージを持つことと、その体験ができる機会を設けた。

さらに、新たな住まいで自分らしく住みこなすための仕掛けを自分で作ることを試行する取組みも実施した。具体的には、今後の住まいの台所の吊り戸棚の位置が高く、住民等の手が届きにくいいため、各自の身長にあった踏み台を作り、吊り戸棚を使いこなすための工夫を実施した。また、壁に釘や画鋲等を打つことが難しい今後の住まいの環境下でも、自身で取り付けることができる棚づくりも試行した。こうした、様々な住みこなしの工夫を試行する過程では、住民の中から、住み替え後の住まいの住みこなしに関する希望の声が聞かれた。

3.3. 人と地域の環境の関わり

人と地域の環境には、身体的・精神的・社会的な関わりがあり、アイデンティティの一部を形成していると捉え、その関わりを維持・継続・更新するための取組みを実施した。市営 A 住宅は、住民等の住み替えが完了した後、数年で更地になることが予定されている。そのため、慣れ親しんだ地域の風景自体を、住み替えからまもなく、目にすることが難しくなる。この風景が地域から失われることは、住民一人ひとりがその風景に対して持つ想いや情景を思い起こす機会自体を失う可能性がある。そこで、市営 A 住宅の風景の記録、地域の環境との関わりの中にある潜在的に大事にしている想いを住み替え後の住まいで維持・継続するための取組みを実施した。

3.3.1. 取組③-1：市営 A 住宅の記録

360 度カメラとドローンでの撮影と、写真による記録を実施した。市営 A 住宅の敷地内（住民の庭や自宅内を含む）20 数か所を 360 度カメラで撮影した。360 度の映像を撮影

することで、地域の風景を、時間が経過したのちも、自らが見たい視点で、見たい場所を見ることができる。写真による記録では、住民との対話を通じて捉えた、人と人、人と住まい、人と地域の環境の関わりの中にある、住民の日常の情景を残すことに留意して、カメラマンによる撮影を実施した。最初は撮影されることに遠慮していた住民の中には、撮影の間に、撮影してほしい場所の希望を伝えたり、庭や自宅の思い出話をしたりする方もいた。

3.3.2. 取組③-2：地域の風景との出会い直し

これまでの暮らしや家族のこと等について住民との対話を重ねる過程で、市営 A 住宅での思い出や情景についても多く語られた。この地域に小さい頃から住んでいる住民、市営 A 住宅が出来て以来、この住宅に住んでいる住民、親子 2 世代に亘って住んでいる住民等もおり、人と地域の環境の間には、この住宅で過ごす中で形成された身体的・精神的・社会的な関わりがあることが見受けられた。

例えば、住民の中には、地域の環境に亡家族との思い出・情景を重ねて語る方が多くいた。具体的には、ある住民は亡父が生前、住まいの庭に植えた椿について、「綺麗な花が咲く」と喜んでいた亡父の姿を重ねて話された。他にも、市営 A 住宅での暮らしについて、亡夫と共に、市営 A 住宅の空き住戸周辺の草むしりをしたことや、住まいの壁を塗ったことなど、亡家族との思い出を重ねて語る様子が見られた。また、住民と、住まいの周辺に住民自身が作った畑や庭との間にも関わりが形成されていることが見受けられた。例えば、ある住民は庭を持つことが自身の長年の夢であり、それを、この住宅で実現し、様々な草花を育てることを楽しんでいた。他にも、庭仕事や畑仕事を通じて、近隣住民との関わりが生まれている状況が認められた。例えば、地域との社交を亡妻に頼っていたある住民は、畑仕事をしている時に、散歩で通りがかる人と話したり、畑仕事で作った野菜のお裾分けをしたりすることをきっかけにして近隣住民との関わりが生まれていた。

こうした様子を踏まえながら、住まいの周囲で行われている畑や庭での植栽に対しては、「植物を育てること自体が好き」、「畑作業を通じて、近隣の人と自然と会話が生まれる機会が大切」等、様々な語られた想いを継続・更新しながら大切にできる機会を試行し、住民達がこれまで育ててきた植物を挿木や、鉢植えに植え替える等して、引っ越し後も育てることができる機会を創出した。

4. まとめと示唆

本取組みを通じて、引っ越し後の暮らしへの住民の意欲が喚起される様子が見受けられ、人と住まい・地域の環境との関わりには、身体的・精神的・社会的な関わりがあり、その関わりがアイデンティティの一部を形成していると捉え得る状況が見出された。本取組みを踏まえて、アイデンティティの一部を形成し、人が Well-being を感じる状況を生み出すプロセスと仕組みについて考察する。

4.1. 自分との出会い直しと、大事にしているモノやコトとの出会い直しのプロセス

アイデンティティの一部を形成し、人が Well-being と感

じる状況を生み出すプロセスの一つとして、人と人、人と住まい、人と地域の環境の関わりの中で形成してきた様々な想いを捉えるための対話的な関わりプロセスの可能性があると考えられる。人と人、人と住まい、人と地域の環境の関わりの中には、思い入れのある家具、住まいの柱や壁に記した子供の身長などの成長記録、庭の植物を通じた住民間の交流等の様々な想い・情景があることが、市営 A 住宅での取組みを通じて見出された。そのため、住み替え等で、長年、生活の一部として存在していた物事を手放さなければならない状況は、自身のアイデンティティの一部を失うような、精神的負担が生じうる可能性があると考えられる。しかし、市営 A 住宅での住み替え準備の初期段階では、住民自身が大事にしている物事に気づいていない状況が見受けられた。例えば、住み替え準備のために家族の形見ともいえるモノの処分が検討されていた。こうした中で、住民のこれまでの人生や、大事にしている物事等について対話を重ねることで、自身も気付いていなかった、そのモノの背景にある自身の想いを本人、周囲とで捉えることができた。さらに、本取組みでは、住み替え後の住まいで、その物事を大事にすることが難しい場合、住民とその物事との関わりの中で形成してきた想いを捉え、整理、維持・継続することで人と物事との関わりを再構成することも、実施した。具体的には、住み替え後の住まいで、思い入れのある家具をそのままの形で使うことが難しい場合に、形やサイズを変えて新たな形で使えるようにすることを実施した。

これらの、人と物事の間の中にある想いを捉え、その関わりの中にある想いを整理、維持・継続することで人と物事との関わりを再構成する対話的な関わりプロセスは、Well-being を感じる状況が生まれる状況を実現する一つの手がかりだと考えられる。

4.2. 主体的に関わりを持つプロセス

人と人、人と住まい、人と地域の環境との関わりの中で大事にしている想いや、暮らしの中で培ってきた生活様式等を意識しながら、人が住まいや地域の環境を自分らしく住みこなすことに関与できるプロセス⁽¹⁶⁾もまた、Well-being を感じる状況を生み出すために重要だと考えられる。本取組みでは、人と人、人と住まい、人と地域の環境との関わりがアイデンティティの一部を形成していると捉えており、それらの関わりに、人が主体的に関与できないことは Well-being を阻害しうる状況だと考えられた。市営 A 住宅の住民の住み替え後の住まいは、外構の大部分をアスファルトで固めたコンクリート造の建物であるため、住民が住まいや地域の環境に主体的に関与するための手がかりを掴みにくい状況であった。こうした状況に対して、本研究では、住み替え後の住まいを自身の生活習慣や身体状況等に馴染むように、手を加えて住みこなすための取組みを実施した。このような、人が暮らしに主体的に関与できるプロセスを経ることで、住民が新しい生活に向けた希望を見出す等、人が Well-being を感じる状況を生み出している様子が見られた。

4.3. 対話的な関わり方の仕組み

上記のプロセスを進めるにあたっては、一人ひとりに注

目すること、特に「潜在的な可能性や思い」に注目する人と人の関わり⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾が重要だと考えている。例えば、本取組みでは、住民が抱えている住み替え準備上の困りごとだけではなく、人や、住まい、地域の環境の関わりの中で大事にしていること等に注目することを目指した。また、住民との間のコミュニケーションにおいては支援者と被支援者ではなく、お互いに一人の人として相対する対話的な関わりがあることも重視した⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾。このように住民等の暮らしに対話的に関わり、一人ひとりの潜在的な可能性（力）を引き出すような仕組みがあることが重要だと考える。また、この対話的な関わりでは、対話を行う場づくりも重要だと考える。例えば、本取組みでは、人と人、人と住まい、人と地域の環境の関わりの中で形成された想い等を捉えるために、住民が安心できる状況、ある物事に対して持つ想いが想起しやすい状況（例えば、住み慣れた住まい）、住み替え後と住み替え前の自分自身についての想いを想起しやすい状況（例えば、3.2.1 節で述べたモデルルーム）など、様々な場で対話的な関わりを実施した。

これらのプロセス自体を、住まいや地域環境のデザインに組み込み、その誘発を目指した仕組みを含むことが、Well-being な住まい・地域づくりに資する可能性があることを見出した。

謝 辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただいた大牟田市の皆様に厚く御礼申し上げます。

文 献

- (1) 内閣府：経済財政運営と改革の基本方針 2022：<https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/cabinet/honebuto/2022/decision0607.html> (参照日 2023 年 6 月 26 日)
- (2) 内閣府：Well-being に関する取りまとめ作業：<https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/action/20220621/sankou1.pdf> (参照日 2023 年 6 月 26 日)
- (3) 近藤克則：「ゼロ次予防」のための設計科学—暮らししている人が健康になる社会づくりに向けて—，横幹，Vol.14, No.1, 16-23, 2020.
- (4) 大牟田市：大牟田市住民基本台帳人口（令和 5 年）：<https://www.city.omuta.lg.jp/kiji0037598/index.html> (参照日 2023 年 8 月 26 日)
- (5) 大牟田市：大牟田市の位置：<https://www.city.omuta.lg.jp/kiji003567/index.html> (参照日 2023 年 8 月 26 日)
- (6) 大牟田市：大牟田市都市計画マスタープラン：https://www.city.omuta.lg.jp/kiji003546/5_546_49155_up_JDQN3VZS.pdf (参照日 2023 年 8 月 26 日)
- (7) 大牟田市：大牟田市の高齢化統計について：<https://www.city.omuta.lg.jp/kiji0034010/index.html> (参照日 2023 年 8 月 26 日)
- (8) 篠原聡子：アジアンコモンズ：今考える集住のつながりとデザイン，平凡社，2021.
- (9) 大谷華：場所と個人の情動的なつながり，環境心理学研究，Vol.1, No.1, 58-66, 2013.

- (10) 園田美穂：住区への愛着に関する文献検討，九州大学心理学研究，Vol.3，187-196，2002.
- (11) 赤星成子，他：国内文献にみる高齢者のリロケーションに関する研究の現状と課題ーリロケーションの理由とリロケーションダメージに着目してー，沖縄県立看護大学紀要，Vol.19，47-54，2018.
- (12) NTT サービス総合イノベーション総合研究所：地域と企業が新しいかたちでかかわり合うパーソンセンタードリビングラボによる社会課題解決の共同実験を開始：<https://journal.ntt.co.jp/article/1042> (参照日 2023 年 8 月 26 日)
- (13) 山内泰：大牟田市がインスパイアする[ケア×暮らし×人間] (その 1) 傾聴ではない，困り事相談でもない。「わたし」が温まる(!?) わくわく人生サロン，精神看護，Vol.23，No.3，244-249，2020.
- (14) 山内泰，他：大牟田市がインスパイアする[ケア×暮らし×人間] (その 2) 「わたしの役柄」が表現すること-哲学者・國分功一郎さんとの対話から，精神看護，Vol.23，No.4，352-356，2020.
- (15) 斎藤環：オープンダイアログとはなにか，医学書院，2015.
- (16) 横山俊祐，他：公営住宅における住み手の自主的増改築の考察：住み手主体の集住環境生成に関する研究，日本建築学会計画系論文集，Vol.60，No.471，47-56，1995.